

琵琶湖から「冬」を追う

白銀に染まる 静寂の世界に 包まれて

冬の撮影は特別だ。秋までに下見をしておいた場所も、雪に覆われると表情が一変し、ルートやスポットの手がかりが掴めなくなってしまう。またそれほど心打たれなかった場所でも、雪化粧によって魅力的な景観に生まれ変わることもある。とにかく積雪のあつた朝は、現地まで行って自分の目で確かめてみるしかない。

琵琶湖周辺の豪雪地帯は、川が見えなくなるほど積もることがある。そういう時は「かんじき」を履き、腰まで埋まりながら川岸を歩く。雪がなければなんなく分け入って行けるところも、足元の状態が分からないので慎重に進むしかない。足を引きずり懸命に歩いているにもかかわらず、振り返ってまだ数十メートルしか動けていないことに気がつくとき、「大自然の前で人間は無力だ」という想いが湧いてくる。

がっかりするのではない。雪があらゆる音を吸い込んでしまった真っ白な世界に立ちすくんでいると、不思議と謙虚な気持ちになってくるのだ。

やっと撮影スポットを見つけた頃には息が弾み、汗をかいている。雪の上に荷物を置けるようすばやく陣を取り、三脚をセットする。雲間から日が差し込んでくると、山里を飾る雪と水面が輝き出す。まるで星空のような美しさだ。凍える手をこすりながら、じつとカメラを構える。雪が木々の枝から川に落ちる音だけが、山間に響き渡っていた。



【写真右】京都府との県境に近い、福井県おおい町名田庄で撮影した南川(みなみがわ)。昨夜来の降雪で木々は雪に覆われている。山の稜線から朝日が顔を出すタイミングを待ってシャッターを押した。

【写真左上】京都府南丹市美山町、盛郷付近の棚野川(たなのがわ)は深い雪の中にあつた。腰まで埋まりながら川岸へ下り、かすかな水音と雪音に耳を澄ませる。静寂が心地よく包み込んでくれた。

【写真左中】比良山地に沿って流れている安曇川(あどがわ)を撮影。豪雪地帯だけあつて積雪が多かつた。古くから鯖街道として栄えた山里は、雪の中でひっそりと春を待つのだ。

【写真左下】丹後富士を望む由良川(ゆらがわ)。山頂からは日本三景の天橋立が見えるそうだ。

